

〈カロスなる生の終り〉と幸福なる者の条件

—Hdt. 1.32.5-9について—

吉 武 純 夫

はじめに

死を καλός 派生語¹で形容することが行なわれるようになったのは Tyrtaios からのことで、それは称えられるべきものとしての戦死について行なわれるのが伝統であった²。しかし、古典期になると例外的事例がいくつか発生する³。その最も挑発的なものは、Aischylos, *Agamemnon* 1610である。そこでは、戦死からは程遠いある死 (καθθανεῖν) が καλόν と形容されているが、そこに従来の「立派な死」(いわゆるカロス・タナトス)をイメージするとしたら、場違いである。

οὕτω καλόν δὴ καὶ τὸ καθθανεῖν ἐμοί, 1610
ιδόντα τοῦτον τῆς δίκης ἐν ἔρκεσιν.

この男がデイケーの網にかかったのを見た私には、ことほどさように、死ぬことさえもカロスである

これは、Agamemnon 殺害を成功させた Aigisthos の有頂天ぶりを表すセリフであるが、彼自身はむしろ死が「受容れられる」ものだ(死んでもいい)ということ在意図している、と予想される⁴。

しかし、死を形容するカロスの意味として、それ(「受容れられる」)がどれだけ通用しえたのかははっきりしない。いっぽう、カロス派生語がそのような意味で死を形容したと確証できると思われる、最も早い現存の例は、Herodotos 1.32.5である。

そこでは、栄華を誇るリュディア王 Kroisos のもとを訪れた Solon が、王に財宝を見せられて、「あらゆる人の中で最も幸福な者」を誰か見たことがあるか(1.30.2)と問われた。詳しくは次節で見るが、かいつまんで説明すると、彼が、それは見事な戦死を遂げた Tellos とい

1 「美しい」や「適切な」などの意味を持つ形容詞 καλός およびその副詞形。

2 カロス・タナトスという概念の伝統と意味については、吉武(2002)および吉武(2007)を見よ。

3 前4世紀までのテキストの中で、戦死、あるいはそれに準ずるような死、ではないとはっきりわかる死に、カロス派生語が付されている例は、ここにあげる A. Ag. 1610と Hdt. 1.32.5の例のほか、E. Alc. 291; Pl. *Epin.* 980.b.5があるだけである。

4 例えば、'Now I can die in honor again, if die I must' (Lattimore)という訳もあるが、'So even death is agreeable to me' (Lloyd-Jones)という訳も行なわれている。

う壮年の男であり、次点者は神殿で榮譽のなか眠るように死んだ若い兄弟 Kleobis と Biton だと答えると、Kroisos は自分を該当者としてもらえなかった事に苛立って、「汝は私が私人たちよりも無価値な者だということか」と問い直す。それに対して Solon は、「汝がカロスに (καλῶς) に生を終える (τελευτᾶν) のを見届けるまでは答えることができない」(1.32.5) と答える。しかし、この答えの言葉には分りにくいところがあり、考えることが求められる。すなわち、〈カロスに (καλῶς) に生を終える〉という部分は、いわゆるカロス・タナトスと同類の意味で用いられているのかどうか？ その問に答えることができるようになるのは、王がカロスに死ぬのを見届けた時だというのはなぜか？ 〈カロスに (καλῶς) に生を終える〉とそのすぐ後に繰返される 〈よく (εὖ) 生を終える〉との意味の違いは何か？ また、そもそも何をソロンは答えることができないと言っているのか？

ともあれ、Solon は、どのような者が幸福者と認定しうるのかを、1.32の終りまでかけて4段階にして説明する。よく考えると、〈カロスに (καλῶς) 生を終える〉の意味に関しては、カロス・タナトスのような称賛すべき死・立派な死という意味ではこの文脈の中ではどうも具合が悪いことも分ってくる。しかし既存訳⁵は、καλῶς という語の曖昧さをそのまま引継いだものばかりである。訳としては問題ないものの、〈カロスに (καλῶς) に生を終える〉が表そうとしている意味を正確にとらえるための助けにはならない。コメンタリーもそのことは触れておらず、この問答について書いた研究書でも、ここに使われたカロス (καλῶς) の意味まで考えたものは、管見の限り無い。それゆえ本稿は、この文脈の中にある論理を検討するとともに、カロスという語の意味の二面性⁶、および幾つかの証拠と照し合わせることを通して、こでの〈カロスに (καλῶς) 生を終える〉の意味を明らかにすることを目指す。

I. 4つの言明

まず該当箇所のテキストを、少々長いが引用しなくてはならない⁷。

1.32.1 Σόλων μὲν δὴ εὐδαιμονίης δευτερεῖα ἔνεμε τούτοισι,
 Κροῖσος δὲ σπερχθεὶς εἶπε· "ὦ ξεῖνε Ἀθηναίε, ἢ
δ' ἡμετέρῃ εὐδαιμονίῃ οὕτω τοι ἀπέροῖπται ἐς τὸ μηδέν,
ὥστε οὐδὲ ἰδιωτέων ἀνδρῶν ἀξίους ἡμέας ἐποίησας;"
 Ὁ δὲ εἶπε· "ὦ Κροῖσε, ἐπιστάμενόν με τὸ θεῖον πᾶν

5 II を見よ。

6 καλός という語にはいわば二面性があって、修飾する対象によって、大きく異なる2つの意味（「すばらしい、感動をもたらす」と「適当である、問題ない」）を持つという事実があるということに関しては、吉武(2007), 88-89を見よ。

7 引用は Legrand (1964) より。ただし Hude による OCT 版の節番号を付した。

ἐὸν φθονερόν τε καὶ ταραχῶδες ἐπειρωτᾶς ἀνθρωπῆϊων
 πρηγμάτων πέρι. [...] Οὕτω ᾧν, ᾧ Κροῖσε, πᾶν ἐστι
 ἀνθρωπος συμφορῆ. 5 Ἐμοὶ δὲ σὺ καὶ πλουτέειν μέγα
 φαίνεαι καὶ βασιλεὺς πολλῶν εἶναι ἀνθρώπων ⁽⁷⁾ ἐκεῖνο δὲ
τὸ εἶρέό με οὐ κώ σε ἐγὼ λέγω, πρὶν τελευτήσαντα καλῶς
τὸν αἰῶνα πύθωμαι. ⁽⁴⁾ Οὐ γάρ τι ὁ μέγα πλούσιος μάλλον
τοῦ ἐπ' ἡμέρην ἔχοντος ὀλβιώτερός ἐστι, εἰ μὴ οἱ τύχη
ἐπίσποιτο πάντα καλὰ ἔχοντα εὖ τελευτήσαι τὸν βίον.
 Πολλοὶ μὲν γὰρ ζάπλουτοι ἀνθρώπων ἀνόλβιοι εἰσι, πολλοὶ
 δὲ μετρίως ἔχοντες βίου εὐτυχέες. 6 Ὁ μὲν δὴ μέγα
 πλούσιος, ἀνόλβιος δέ, δυοῖσι προέχει τοῦ εὐτυχέος μῦνον,
 οὗτος δὲ τοῦ πλουσίου καὶ ἀνολβίου πολλοῖσι· ὁ μὲν ἐπι-
 θυμῆν ἐκτελέσαι καὶ ἄτην μεγάλην προσπεσοῦσαν ἐνεῖκαι
 δυνατώτερος, ὁ δὲ τοῖσδε προέχει ἐκείνου· ἄτην μὲν καὶ
 ἐπιθυμῆν οὐκ ὁμοίως δυνατὸς ἐκείνῳ ἐνεῖκαι, ταῦτα δὲ ἡ
 εὐτυχίη οἱ ἀπερύκει, ἄπηρος δὲ ἐστι, ἄνουσος, ἀπαθῆς
 κακῶν, εὐπαις, εὐειδής· ⁽⁷⁾ εἰ δὲ πρὸς τούτοισι ἔτι τελευτήσει
τὸν βίον εὖ, οὗτος ἐκεῖνος τὸν σὺ ζητέεις, <ὁ> ὀλβιος
κεκλιῆσθαι ἀξιός ἐστι· πρὶν δ' ἂν τελευτήσῃ, ἐπισχεῖν
μηδὲ καλέειν κω ὀλβιον, ἀλλ' εὐτυχέα. 8 Τὰ πάντα μὲν νυν
 ταῦτα συλλαβεῖν ἀνθρωπον ἔοντα ἀδύνατόν ἐστι, ὥσπερ
 χώρα οὐδεμία καταρκέει πάντα ἑωυτῇ παρέχουσα, ἀλλὰ
 ἄλλο μὲν ἔχει, ἑτέρου δὲ ἐπιδέεται· ἡ δὲ ἂν τὰ πλεῖστα
 ἔχη, αὕτη ἀρίστη. Ὡς δὲ καὶ ἀνθρώπου σῶμα ἓν οὐδὲν
 αὐταρκές ἐστι· τὸ μὲν γὰρ ἔχει, ἄλλου δὲ ἐνδεές ἐστι· ⁽⁸⁾ ὅς
δ' ἂν αὐτῶν πλεῖστα ἔχων διατελέῃ καὶ ἔπειτα τελευτήσῃ
εὐχαρίστως τὸν βίον, οὗτος παρ' ἐμοὶ τὸ οὐνομα τοῦτο,
ᾧ βασιλεῦ, δίκαιός ἐστι φέρεσθαι. Σκοπέειν δὲ χρῆ παντὸς
χρήματος τὴν τελευτὴν κῆ ἀποβήσεται· πολλοῖσι γὰρ δὴ
ὑποδέξας ὄλβον ὁ θεὸς προορίζους ἀνέτρεψε." (1.32.1-9)

1.32.1 ソロンはこのように幸福の第二位を右の兄弟に与えたのであるが、クロイソスは苛立っていった。

「アテナイの客人よ、そなたが私をそのような庶民の者どもほどにも値しないとするほど、

そなたは私のこの幸福は何の価値もないと、思われるのか。」

ソロンが答えているのに、

「クロイソス王よ、あなたは私に人間の運命ということについてお尋ねでございますが、私は神と申すものが嫉み深く、人間を困らす事のお好きなのをよく承知いたしております。[……] さればクロイソス王よ、人間の生涯はすべてこれ偶然なのでございます。5 あなたが莫大な富をお持ちになり、多数の民を統べる王であられることは、私にもよく分っております。⁽⁷⁾しかしながら今お尋ねのことについては、あなたが結構なご生涯を終えられたことを承知いたすまでは、私としましてはまだ何も申し上げられません。⁽¹⁾どれほど富裕な者であろうとも、万事結構ずくめで一生を終える運に恵まれませぬ限り、その日暮らしの者より幸福であるとは決して申せません。腐るほど金があっても不幸な者も沢山おれば、富はなくともよき運に恵まれる者もまたたくさんおります。6 きわめて富裕ではあるが不幸であるという人間は、幸運な者に比べてただ二つの利点をもつに過ぎませんが、幸運なものは不幸な金持ちよりも多くの点で恵まれております。なるほど一方は欲望を充足したり、降りかかった大きな災厄に耐える点では、他方より有力ではございましょう。しかし幸運な者には他方ない次のような利点がございます。なるほど欲望を満足させたり、災厄に耐える点では金持ちと同じ力はございますまい。しかし運が良ければ、そういう事は防げるわけでございます。身体に欠陥もなく、病を知らず、不幸な目にも遭わず、良い子に生まれ、容姿も美しい、という訳でございますからね。7⁽⁹⁾その上更に良い往生が遂げられたならば、その者こそあなたの求めておいでになる人物、幸福な人間と呼ぶに値する人物でございます。人間死ぬまでは、幸運な人とは呼んでも幸福な人と申すのは差し控えねばなりません。

8 人間の身としてすべてを具足することはできぬことでございます。国にいたしましても、必要とするすべてが足りているようなところは一国たりともございませぬ。あれはあるがこれはない、というのが実情で、一番沢山ある国が、最も良い国ということなのでございます。人間にいたしましても同じことで、一人一人の人間で完全に自足しているようなものはおりません。あれがあればこれがないと申すわけで、9⁽¹¹⁾できるだけ事欠くものが少なくて過ごすことができ、その上結構な死に方のできた人、王よ、さような人こそ幸福の名をもって呼ばれて然るべき人間と私は考えるのでございます。いかなる事柄についても、それがどのようになってなったのか、その結末を見極めるのが肝心でございます。神様に幸福を垣間見させてもらった末、一転して奈落に突き落とされた人間はいくらでもいるのでございますから。」(松平千秋訳。ただし、ゴシック体は吉武が原文にもとづき改変した部分。網掛けは、検討の必要があるが改変していない部分。)

この箇所において、Solon は、幸福ということについて下線部(7)~(11)の4段階の説明をして

Kroisos の間に答えている。その全体を見渡しながらか、(ア)で言われている〈カロスに (καλῶς) 生を終える〉——それは松平訳では「結構なご生涯を終え」とされている部分である——の内容を解き明かす手掛りを探してみよう。(ア)の最初にある「今お尋ねのこと」(ἐκεῖνο δὲ τὸ εἰρώ μὲ) とは、Kroisos の発した第一の間(最も幸福な人を見たことがあるか)(1.30.2)ではなく、第二の間(Kroisos は私人たちよりも無価値なのか：引用の二重下線部)であると解するべきである。なぜなら、第一の間に対する答え(Tellos や Kleobis と Biton の名)はすでに答えられているからである⁸。ならば Solon は、Kroisos がどのように死ぬかを見届けるまでは答えることができない、と答えても良いはずであった。しかし彼はあえて、〈カロスに (καλῶς) 生を終える〉のを見届けるまで答えられないという。よく考えてみると、A〈彼がいま問われていること(Kroisos は一般の私人よりも無価値であるか)について何らかの答えを言えるために必要なこと〉は、B〈Kroisos が最も幸福な者(ὀλβιώτατος)であると判定するために必要なこと〉とも違うし、C〈彼がその日暮しの者より幸福な者(ὀλβιώτερος)であると判定するために必要なこと〉とも違うし、またD〈彼が幸福者(ὀλβιος)であると判定するために必要なこと〉とも違う。Bのためには、Kroisos が最高レベルの死に方をするのを見届けることが必要であろうが、CやDのためにはそれよりは劣るよい死を見届けるだけで足りるだろう。ましてやAのためにはさほどのよさも必要ないはずである。また、一般人たちよりも無価値であると判定するために必要は、Solon の富による幸運を相殺するような、ある程度悪い死を見届けなくてはならないだろう。しかし少なくとも、一般人たちよりも無価値でないということ⁹を判定するためには、そこまでは必要ない。特別よい死を見届けるのではなく、良さもほどほどな死を見届ければいいはずである。彼は富に恵まれているのだから、悪い死に方をするのでもなければ、普通の人より幸福度において劣る事はない、というのが自然に導かれる判断である。それならば、Aの内容はおのずと明らかで、それは Kroisos が〈問題ない死に方をする〉かどうかを見届けることである。それを見届けさえすれば、王が一般人よりも無価値だということはないと言えるのである。

従って、下線部(ア)において Solon が言おうとしたはずのことは、「王が悪くない死(問題のない死)を迎えるのを見届けるまでは、彼が一般人よりも無価値だということを否定することはできない」ということである⁹。ただし、「一般人よりも無価値である」というような可能性に触れて相手の気に触ることを避けるために、「何も答えることはできない」と言換えたのであろう¹⁰。つまりは、(ア)の καλῶς は「問題なく」という意味であると解されるのである。この語

⁸ Stein のコメンタリ (ad 32.24) は、それ (ἐκεῖνο) を「幸福であること」(ὀλβιον εἶναι) と明言しており、大抵の訳はそれに随っているものと見られる。Hellman の研究書 (46) も例外ではない。しかし、それは論理的に受容れがたい。

⁹ Solon の(ア)の答えには、「王がいかに死ぬかを見届けるまでは、何とも答えることができない」と言った場合よりも少し多くの情報が盛込まれている、ということに注意されたい。

¹⁰ Solon が Kroisos に対して見せている世辭のうまさについては、Pelling, 106を見よ。しかしそれでいて、彼は毅然とした態度を崩さない。Cartledge & Greenwood, 351-52, 357も見よ。

にもともとそのような意味があるのかどうか、ということはⅡで検討する。その前に、引用箇所ですべて述べられている残りの主張を整理しておこう。

下線部(イ)では、〈任意の金持ちが、その日暮しの者よりも幸福な者 (ὀλβιώτερος) と判定されるための条件〉——それは上記Cを一般化したものごとである——が示されている。それは先述の通り、(ア)に示されていた条件よりもハードルの高い条件であるはずだ。そのことに対応するように、ここで示されている条件は、〈πάντα καλά ἔχοντα εὖ τελευτήσαι τὸν βίον するのを見届ける〉というものである。ここでの πάντα καλά にどういう意味があるのかは問題含みであるが¹¹、一応松平訳では「万事結構づくめで」とされている。そして更に、死の部分には εὖ という副詞が付けられていて、καλῶς が付されている(ア)の場合とは少なくとも言葉の上で明確に区別されている。εὖ とは単刀直入に「よく」ということを表す言葉であるから、εὖ τελευτήσαι τὸν βίον が付された死とは、普通以上のよい死をさしているはずである。少なくとも(ア)で言われている死よりもよいものを出していると考えられる。なお、τελευτήσαι に付されている ἔχοντα は同時性を表す現在分詞なので、(イ)では死ぬ一時を捉えて、死にぞまとその時の身の回りの様子から幸福度を判定するという方法がとられているといえる。

(ウ)では、〈幸福 (ὀλβιος) とされるに相応しい人の条件〉——それは上記Dを一般化したものごとである——が示されるが、それは、五体満足、健康、災厄なし、子宝、美貌というほかに、さらに、(イ)と同じ言葉で表された〈よく (εὖ) 生を終える〉というものである。それは結局、(イ)の条件として示されていることとほぼ同じ事だと考えられる。Kroisos が一般人よりもっと幸福 (ὀλβιώτερος) と判定されるための条件として述べたものが(イ)であり、一般論として人が幸福 (ὀλβιος) として認定されるための条件として述べたものが(ウ)なのである¹²。

(エ)で示されるのは、「かの名前」(τὸ οὐνομα τοῦτο)¹³を正当に持することができる人の条件である。それは、人々が欲しくても手に入れられぬようなものを、最も多く生涯持ち続け、さらに恵みを感じさせるような仕方(εὐχαρίστως) 死んだ者ということである。この条件の構成の仕方は、境遇も死もともに良いということを挙げているところが(イ)および(ウ)とよく似ているのだが、次の点においてそれらとは差別化されていると考えられる。すなわち、境遇に関しては、「それらの最も多くを持ちながら」(αὐτῶν πλείιστα ἔχων) として最上級が用いられていることと、(イ)(ウ)にはなかった幸運の継続という要素が διατελέη によって明言されていること、そしてさらに死に関しては、εὐχαρίστως という語によって、単なる εὖ よりも、χάρις (恵み) という特別なものが加わったより上級の良さが示唆されていることである。それならば、(エ)が示しているのは(イ)や(ウ)よりも上の条件であると考えられる。それゆえ、これは一般に

¹¹ πάντα καλά という有名なフレーズをもった Simonides の断片については、Ⅲを見よ。

¹² ただし、(ウ)はもともと幸運に恵まれている人ならば、という話であるから、生涯を通じて不運には襲われていないということが前提になっている。

¹³ 一般には、ὀλβιος なる者という評価のこととして解されており、松平訳もそのようにとっているが、原文はそうではない。以下で検討する。

解されているような、「幸福 (ὄλβιος) なる者」という称号を持するに相応しい人の条件ではなくて、Kroisos の発した第一の間 (1.30.2) にあった「最も幸福なる者 (ὄλβιώτατος) なる者」の条件——それは上記Bを一般化したものごとである——であったと解するのが妥当であろう。「かの名前」(τὸ οὖνομα τοῦτο) とはそのことを言っていたのだと考えられる¹⁴。

そうであるとすれば、ここには死の良し悪しのほかにも、〈巡り合わせ (富裕以外の要素も含めた) の良し悪し〉と〈人生の途中における浮沈〉という2つの因子が評価の対象としてあり、(ア)においては特にどちらも考慮されていないが、(イ)においては前者が、(ウ)と(エ)においては両者がともに考慮されているのだと言える。そして、(ア)は Kroisos が一般人よりも無価値な者であるかないかを判定する基準を、(イ)は誰であれ富裕な者が一般人よりも ὄλβιος に近いかどうかを判定する基準を、(ウ)は人が ὄλβιος と判定されるための基準を、(エ)は人が ὄλβιώτατος と判定されるための基準を示したものだということになる。(ア)の ἐκεῖνο や καλῶς についての理解、(エ)の τὸ οὖνομα τοῦτο についての理解を誤ると、1.32の(ア)(イ)(ウ)(エ)は、同じことを何度も繰返しているようにも見えるが、実は幸福度の4つのレベルの説明を低い方から順に積み重ねたものなのだと言える。

II. カロス (καλός)

前節においては、καλῶς という語が「問題ない仕方で」という意味を表していると考えられるほかないという結論に達した。いまここで、この語がもともとそういう意味を持っているのか、ということを検討してみたい。

まず参考のために、(ア)の πρὶν τελευτήσαντα καλῶς τὸν αἰῶνα πύθωμαι に対する既存の諸訳を挙げる。εὔ という語との対比も重要になってくるので、(ウ)の εἰ δὲ πρὸς τούτοις ἔτι τελευτήσει τὸν βίον εὖ に対する訳もカッコつきで併記する。

Godley (1920) : before I hear that you have ended your life well.

(If besides all this he ends his life well.)

Rawlinson (1910) : until I hear that thou hast closed thy life happily.

(If, in addition to all this, he ends his life well.)

Powell (1949) : until I hear that thou hast ended thy span well.

(And if besides he ends his life well.)

Legrand (1964) : avant d'avoir appris que tu aies terminé tes jours dans la prospérité.

(Si, de plus, il a encore une belle fin de vie.)

Sontheimer (1964): ehe ich erfahren habe, daß du dein Leben gut beendet hast.

¹⁴ Thompson, 15は、τὸ οὖνομα τοῦτο についてそのように解していると見られる稀な例である。

(Wenn er dazu noch sein Leben gut beendigen wird.)

Braun (1927) : bevor ich weiß, ob dein Leben bis zu Ende glücklich gewesen.

(Ist ihm dazu auch noch ein gutes Ende beschieden.)

これらを眺めてみると、(ア)の $\kappa\alpha\lambda\acute{\omega}\varsigma$ と(ウ)の $\epsilon\bar{\upsilon}$ に同じ訳を宛てているものも少なからずあり、また、二者の間で言葉を変えている場合も、内容がどのように違うのかあまりよく分るようにはなっていない、というのが実情である¹⁵。しかし I で述べたように、(ア)と(ウ)は異なる条件を提示しているはずなのである。

ところで辞書を引くと、Liddel, Scott and Jones のレキシコンでは $\kappa\alpha\lambda\acute{o}\varsigma$ の副詞的用法の項目 (s.v. $\kappa\alpha\lambda\acute{o}\varsigma$, C.II.1.) に、 $\kappa\alpha\lambda\acute{\omega}\varsigma$ の意味の 1 つとして、*rightly* や *deservedly* という意が載せてあり¹⁶、ここで私の考えている意味に最も近いのはそれである。ただし、その意味がここで用いられているとしても、実際にはどういうことを表すことになるのかについて、注意が必要である。例えば、王が *rightly* に / *deservedly* に¹⁷ 死ぬと言え、完璧に理想的な死を思い浮かべやすいが、ここで意味されているのはそういうものだろうか。(ア)で言われているのは、一般の私人たちよりも劣ることにならないためのぎりぎり最低限の死に方をクリアするのを見届けなくてはならないということである。すなわち、ここで意識されているのは、どんな死に方が王に相応しいかということよりも、むしろどんな死に方までなら許容されるのか、そしてどんな死に方ならダメなのかということである。一言で言うならば、(ア)はそういう許容範囲の下限を示したものだと考えられる。

ここで指摘したいのは、Homeros の時代から $\kappa\alpha\lambda\acute{o}\varsigma$ という語には、対象が〈特別に魅力的である〉ということを表す働きのほかに、対象の状態が〈そうでなくてはならないという範囲内にある〉ということを表す働きをも持っていたということである¹⁸。その意味での $\kappa\alpha\lambda\acute{o}\varsigma$ は否定文において中性形 ($\kappa\alpha\lambda\acute{o}\nu$) で用いられるのが通例で、その場合はいずれも、好適でないというよりは拙いという状態を表すものであった¹⁹。肯定文で用いられた例も、Homeros の中には一件あり、それは、 $\acute{\epsilon}\sigma\tau\alpha\acute{o}\tau\omicron\varsigma \mu\acute{\epsilon}\nu \kappa\alpha\lambda\acute{o}\nu \acute{\alpha}\kappa\acute{o}\upsilon\epsilon\iota\nu, \omicron\upsilon\delta\grave{\epsilon} \acute{\epsilon}\omicron\upsilon\kappa\epsilon\iota\nu / \acute{\upsilon}\beta\beta\acute{\alpha}\lambda\lambda\epsilon\iota\nu$ (立って弁ずる人に耳を傾けるのがカロンなることであり、口を挟むことは妥当なことではない: II. 19.79-80) というものである。ここで $\kappa\alpha\lambda\acute{o}\nu$ が示しているのは、「特段に素晴らしい」ということで

¹⁵ Legrand の仏語訳は、例外的に差異をはっきりさせてあると言える。しかし両行ともどのような根拠でそのような訳になったのかという疑問はぬぐえない。

¹⁶ Bailly では *convenablement* (s.v. $\kappa\alpha\lambda\acute{\omega}\varsigma$, III. 2)、Snell では *geziemend, schicklich, wie es sich gehört* (s.v. $\kappa\alpha\lambda\acute{o}\varsigma$, B.3b.)

¹⁷ あるいは、*convenablement* に、*geziemend* に、でもよい。

¹⁸ Homeros において、前者の意味は、官能的にとらえられる対象を形容する場合の $\kappa\alpha\lambda\acute{o}\varsigma$ に適用され、後者の意味は、官能的にとらえられない対象を形容する場合に適用された、ということが、吉武 (2007), 89-93 で論証されている。

¹⁹ 吉武 (2007), 89 を見よ。

はなくて、「そうであって然るべき、そうでなくてはならない」ということであろう。

καλός 派生語が、〈すぐれていること〉を表すものでなくて、〈守るべき基準や許容範囲内にあること〉を示すという例は、古典期においても多数見られる。Sophokles 作品から挙げるならば、例えば、*Ant.* 638 (σοῦ καλῶς ἡγουμένου) では、父への恭順を示そうとしている Haimon は、「汝が優れた導きをしてくれる限り」という、より低い条件を出しているはずで、「汝がまともな導きをしてきている限り」と言っていると解すべきだろう。*Ant.* 925 (εἰ μὲν οὖν τάδ' ἔστιν ἐν θεοῖς καλὰ) では、Antigone が自らの正当性の確信を失う (Ξυγγοῖμεν ἡμαρτηκότες) ための条件は、「Kreon のやり方がもし神々の世界で好評を博しているなら」というよりもっと低いはずで、「可とされているなら」ということでも十分であろう。*Ant.* 723 (καὶ τῶν λεγόντων εὖ καλὸν τὸ μανθάνειν) は、Haimon が「良いことを言う者からは学ぶのが立派なことだ」と言っておだてながら父を諭しているように見えるかもしれないが、それに劣らず、「そうすることこそが許容されうるのだ」という断固たる口調を聞き取ることもできる。*Aj.* 586 (Μὴ κρῖνε, μὴ ἔξεταζε· σωφρονεῖν καλόν.) も、「分別を持つことが立派なのだ」と勸奨しているように見えるかもしれないが、夫が妻に一方的に指図しているという文脈からするとやはり、「他ならずそうすることこそが許容されうるのだ」ということだと理解すべきだろう。

このように、適当・妥当を表す時の καλός は、何よりもまず、許容範囲内にある・問題ない、ということを表すものであって、必ずしも理想的状態やすぐれていることを称える言葉ではなかったのである。ただし、他方で姿形や音声を形容する時はもっぱら特段の卓越性を称える言葉であるからまぎらわしいのも事実であるが。

Ⅲ. パンタ・カラ (πάντα καλὰ)

このことがはっきりすると、件のテキストの(イ)の πάντα καλὰ ἔχοντα についても見えてくることがある。(イ)の従属節の部分には、「すべてのことが素晴らしい状態にあるなかで良い死を迎える、という幸運に恵まれぬ限り」という意味だけではなく、「すべてのことが問題のない状態にあるなかで良い死を迎える、という幸運に恵まれぬ限り」という意味に解する余地もあるのである。これは、どちらもありえて大差ないようにも思える。しかし、(イ)が表そうとしているのは、金持ちが「確かに幸福な者」と判定されるための条件ではなく、「その日暮しの者よりは幸福な者」と相対的に判定されるための条件である。そのためには、さほど良きことが要求されているのではないはずである。(イ)で言われていることを分析してみよう。そこで問題にされているのは、〈死のよしあし〉と〈財力〉と〈それ以外の万事の状況〉という3点である。まず〈死のよしあし〉という点で見ると、「その日暮しの者」たちのうちには、よき死を遂げる者もあるしそうではない者もあるはずであるが、(イ)で ὀλβιώτερος と判定されている

人は、よき死を遂げたという点において前者の者と同等である。そこに〈財力〉という観点を加えると、彼は「大いに富裕である」(ὁ μέγα πλούσιος)²⁰とされている以上、財力の点では確実に「その日暮しの者たち」よりも勝っているのである。その彼がもし、〈それ以外の万事の状況〉においてほかに厄介ごとを抱えているとすれば、財力による幸福が相殺されて、彼は優位性を失ってしまうかもしれない。しかしその点で問題なしでさえあれば、彼の優位性が覆ることはない。彼がその日暮しの者よりも幸福と判定されるためにはそれだけで十分なはずである。それではもちろん、(ウ)で示される真なる幸福者の条件には及ばない。しかし彼が裕福であり死のよしあしで遜色ないのであれば、その日暮しの者より幸福に近いとされるためには、死に際しての身の境遇が必ずしも上々である必要はないのである。従って、(イ)の καλὰ も、「素晴らしい」ではなくて「問題のない、許容範囲内にある」という意味で解するのが妥当だと判断される。

このことと共鳴するのは、Herodotos と同じ時代を生きた Simonides の歌った、πάντα τοι καλὰ, τοῖσιν / τ' αἰσχρὰ μὴ μέμικται. (恥ずべきもの・醜きものが混り込んでいないものはすべてカロスなのだ。)という詩句である (Fr. 542.39-40 (PMG))。この καλὰ には好ましいという響きがあるにしても、この句が実質的に言っているのは、「特段に好ましい何かがある」ということでなくて、「差し障ることが何もない」という状態がカロスということなのだ、ということである²¹。それは、問題のないだけでもすばらしいことなのだ²²と持ち上げているのだとも言えるが²²、しかし同時に、どこまでをカロスと言いうるかということ、いわばカロスということの下限を説明しているのだとも言える²³。

20 この部分の松平訳では、「どれほど富裕な者 (であろうとも)」とされているが、原文は「いかなる大いに裕福な者 (でも)」であり、裕福さの程度に譲歩がかけられているわけではない。

21 また Pindaros, Fr. 127.9 (Snell-Maehler) は、神殿に捧げられた百人の少女たちが「愛欲の床で柔らかな季節の実を刈り取る」ことをアフロディテ女神がよしとした (ἀνευθ' ἐπαγορίας ἔπορευεν) という事に添えて、σὺν δ' ἀνάγκῃ πᾶν καλόν (避けられぬ事情のもとではすべてがカロスである) と述べている。ここにおいてカロスはどういうことを表しているだろうか。少女たちが多数の客の愛欲の相手をするのが基本的には問題ある行為だ、という認識がここにあることは、ἐπαγορία という語を添えていることから明らかである。「しかしそれにもかかわらず、この特殊事情 (女神がよしとしたという) においてはこれは全くすばらしいことなのだ」という趣旨を引用部分に見込むことも可能であろうが (Most, 144 を見よ)、「しかし、避けられぬ事情のもとではいかなることも是認して受容れるべき (受容れるのがよい) なのだ」という、一般論としても理解可能な趣旨を見込むこともできる。冠詞も指示詞も用いられていないことから、後者の妥当性は小さくない。その場合、カロスは「問題なしとして是認されるべき (されてよい)」という言葉に置きかえればよいのであるが、それはまさに、上で我々が辿りついたカロスの意味と同じである。

22 Most, 143 を見よ。

23 Vernant, 90 は、Simonides のこの言明にカロスという概念の転機を見る事ができると主張しているが、II に述べたことから分るように、これは Homeros の時代からこの語の持っていた意味のひとつに過ぎないと私は考える。

Ⅳ. 「問題のない死」の下限

ここでもう一つ考えてみたいのは、「問題のない死」の下限である。もちろん、良き死はすべて「問題のない死」のうちである。しかし、さほど良いわけでもない死なら、どの程度までを「問題のない死」と言えるか、ということはやや厄介な問題である。というのは、「問題のない死」はそれだけでもずいぶん良いものと見做されるように思われるからだ。Platon, *Hippias Major*, 291 DE が、「いかなる人にも、いかなる場合にも、つねに最も美しいこと」としてあげているのは、「裕福で健康で、ギリシア人に尊敬され、老齢まで生き、自分の両親亡きあとこれを立派に弔い、そのあとで自分の子供たちによって、立派に、そして偉大な人間に似つかわしい仕方で埋葬されること」である(北嶋美雪訳)。これはいわば、良きことの集成として自由に発想されたものであるから、当然、彼の死も良いものが想定されているはずであるが、特に死に方については何も言及されていない。そこで考えられるのは、老齢まで生きたということ以外は語り草にもならないような、〈何事もない死〉である。特に苦しむわけでもなく、自然に衰弱して死ぬのだとすれば、それは確かに問題のない死であり、名誉の死には及ばないにしても、誰もが願う理想的な死のひとつであろう。(イ) (ウ) (エ) で言われていたような〈良い生の終り〉の一つとして数えられてもおかしくはない²⁴。しかし「問題のない死」とは、必ずしもそれほど申し分のない死ばかりを言うものではないだろう。良くも悪くもない死というのがあるのかどうかは定かではないが、悪くない死であればいかなる死も包括する、というのが「問題のない死」の論理である。

このようにとらえると、(ア)に該当する死はイメージしにくくなるのは確かである。しかし、同じことを反対側の視点から、すなわち「問題のある死」の側からとらえると、ずっと分りやすくなる。すなわち、(ア)の言わんとしていることは、「問題のある死²⁵を遂げる者は、(いかなる富裕をたくわえたとしても²⁶) 幸福度において一般人にさえも及ばない」ということなのである。

²⁴ おそらく、*Hippias Major* からの引用で語られているような者は、(ウ)の条件を満たす者(ἄλιος)であろう。Shapiro, 351-52は、Solonにおける「よき生の終り」とは、①大きな働きをした後(まもなく)に、②仲間にもまれて死に、③永遠の名誉を得ることだと分析する。それでは、何事もない死は含まれないことになる。しかし、たとえば〈幸運に恵まれて生き、何事もなく死んだ〉というような者が(ウ)の条件から外れ、幸福とはみなされないというのは奇妙だといわなくてはならない。もちろん、Shapiroの3つの条件を見たす死が「よき生の終り」に属するものであることは疑いないが、それが「よき生の終り」のすべてであるという所に、おそらく誤りがある。(死ぬ前の偉大な行動を重視する人は、他にも Konstan, 16がある。) Asheri, 97-98も見よ。

²⁵ 問題のある死というのは、事故死、暗殺、自殺、刑死、苦痛の激しい病死、そして埋葬を禁止された死などである。問題のない死というのは、それに比べて思い浮かべにくいのが特徴である。

²⁶ 上掲の松平訳では、(イ)のところに「どれほど富裕な者であろうとも……であるとは決して申せません」とあるが、(イ)の原文にあるのはそれほど強い否定ではない。それに相当する強い否定のニュアンスは、むしろ、「あなたほどに裕福な方でも、差し障りのない死を遂げない限り、一般人にもかなわないということになる」という趣旨である(ア)の中に埋め込まれているのである。Kroisosにとっては、こちらの方がよほどショッキングな言葉であるはずだ。ただしそれは、彼が(ア)の内容を正しく理解できればの話である。

V. καλός 派生語で修飾された二つの死

これまでの議論で、(ア)において καλῶς で修飾された死は、問題のない死、あるいは問題なしとして是認される死という意味のものだったことが明らかになった。しかしそれならば、称賛・憧れの対象、すばらしきものとしてとらえられてきた従来のカロス・タナトスという概念との間に、どんな区別がなされているのか／いないのか、ということが問題となってくる。ここで注目すべきは、Herodotos の言葉遣いである。

この問答の前の方で、Tellos の戦死は ἀπέθανε κάλλιστα (1.30.5) と表現されていた。κάλλιστα は、卓越した好ましさを表すものとしての καλός の最上級の副詞として使っているということに疑う余地はない。特筆すべきなのは、ここで θνήσκειν (死ぬ) という動詞 (の合成動詞) が一緒に使われている事である。しかるに、問題ないだけの死を表す(ア)においては τελευτᾶν (終える) という動詞が、αἰῶνα (生を) を添えて使われていた。続く(イ)(ウ)(エ)でも、一般の死を表すために τελευτᾶν の語が βίον (生を) を添えて繰り返し使われている。死を表すことでは同じなのに、戦死を表す時だけ θνήσκειν を用い、その後一般的な死を表すためには τελευτᾶν を 4 回続けて用いているということは見逃せない。

このことから、Herodotos は、戦死とそれ以外の死を表すに当たっては言葉を明確に使い分けているということが推定される。実際に Herodotos の全体を調べてみると、戦死ではない死が肯定的修飾語で肯定される場合は、いつも τελευτᾶν 派生語を、生を表す目的語とともに用いているということが分る (全 7 件)。そのうちわけは、εὖ との組合せが 5 件²⁷、ἀρίστη との組合せが 1 件²⁸、καλῶς との組合せが 1 件²⁹ である。つまり、この場合、修飾語に καλός 派生語を使っても、θανεῖν 派生語と組み合わせることは避けられているのである。他方、そういう組合せは戦死にしか使っていない³⁰。

もちろん、τελευτᾶν 派生語を戦死に使った例は多数あるが (9.79 など)、殆どが目的語を取らずに用いられていて、生を現す目的語 (βίον や αἰῶνα) が付される場合はごく僅かしかない。このことが示唆するのは、死を「人生」の一部 (締め括り) としてとらえる場合と、θανεῖν 等の語によって独立した一時的な事象としてとらえる場合という区別がなされているのではないか、ということである。それを確証することは難しいと思われるが、確かに言えるのは、Kroisos と Solon の問答において、τελευτᾶν (τὸν αἰῶνα/τὸν βίον) と θνήσκειν の二つの動詞がはっきり使い分けられていて、「問題のない死」を意味する〈カロスなる生の終り〉と、「称えられる死・すばらしい死」を意味する〈カロス・タナトス〉が同じものには聞こえ

27 上記(イ)(ウ)(エ)および 3.43; 6.135.

28 1.31.3.

29 上記(ア)。

30 1.30 (Tellos の死) と 3.73 の 2 件。

ないようになっているということである³¹。

VI. まとめ

以上の議論から得られた結論は、以下の通りである。Hdt. 1.32.5に言う〈カロスに (καλῶς) 生を終える〉とは、「問題のない死」を迎えるということである。Solon はそれを出発点として、幸福者とはどういう者のことかを、4段階に分けて述べてゆくが、彼がきわめて重要視する因子は、どんな死に方をするかということであった。この問答は確かに、幸福者（あるいは最も幸福な者）と言えるためには何が必要かを問題とし、そのためには、人生を通して良い境遇に恵まれることに加えて、「よい死」が必要であると言っている。しかしそれに劣らず重要なメッセージとしてここに打出されているのは、「よい死」よりも「問題のない死」を遂げることが肝心で、もし悪い死に方をすれば、いかなる富裕者であっても、(普通の死に方をする)庶民にさえかなわないことになってしまう、ということである³²。

文献表

- D. Asheri, *A Commentary on Herodotus*, Book 1-4 (Oxford 2007).
 A. Bailly, *Dictionnaire grec français* (Paris 1950).
 T. Braun (tr.), *Das Geschichtswerk des Herodot von Halikarnassos* (Leipzig 1927).
 P. Cartledge & E. Greenwood, 'Herodotus as a Critic: Truth, Fiction, Polarity', in *Brill's Companion to Herodotus*, ed. by Bakker et al. (Leiden 1988), 351-71.
 C. C. Chiasson, 'The Herodotean Solon', *GRBS* 27 (1986), 249-62.
 E. D. Godley (tr.), *Herodotus*, vol. 1 (Cambridge, Mass. 1920) (Loeb Classical Library).
 F. Hellmann, *Herodots Kroisos-Logos* (Berlin 1934).
 W. W. How & H. J. Wells, *A Commentary on Herodotus* (Oxford 1912).
 C. Hude (ed.), *Herodoti Historiae* (Oxford 1927) (Oxford Classical Texts).
 D. Konstan, 'The Stories in Herodotus' *Histories*: Book 1', *Helios* 10(1983), 1-22.
 Ph.-E. Legrand (tr.), *Herodote, Histoires, Livre I* (Paris 1964) (Collection de Budé).
 H. G. Liddell and R. Scott, *A Greek-English Lexicon*, rev. by H. S. Jones (Oxford 1940).
 G. Most, 'Simonides' Ode to Scopas in Contexts', in *Modern Critical Theory and Classical Literature*, ed. by de Jong & Sullivan (Leiden 1994), 127-52.
 C. Pelling, 'Speech and narrative in the *Histories*', in *Cambridge Companion to Herodotus*, ed. by C. Dewald et al. (Cambridge 2006), 103-21.

³¹ カロス・タナトスの最たるものとして記述した Tellos の死も、1.30.4では、τελευτή τοῦ βίου λαμπροτάτη (生の最も輝かしい終り) とされている。それはここで導いた結論と矛盾するようには見えない。しかし、1.30.5で語られるように、彼が戦死後、国費で死地に埋葬され、そして大いに顕彰されたという事情を考えてみるべきであろう。ここで「生の終り」という言葉が表しているのは、戦死という事件だけでなくその周辺事情をも含めたものとしての彼の死であると解される。

³² ただし、Solon を立ち去らせてしまう Kroisos は、それが自分にとっての警告であることをこの時は理解できずに終わる (1.33)。このことについては Turpin, 535-37を見よ。

- J. E. Powell (tr.), *Herodotus*, vol. 1 (Oxford 1949).
 G. Rawlinson (tr.), *The History of Herodotus*, vol. 1 (London 1910) (Everyman's Library).
 S. O. Shapiro, 'Herodotus and Solon', *ClAnt* 15 (1996), 348-64.
 B. Snell, *Lexikon des frühgriechischen Epos* (Göttingen 1955).
 W. Sontheimer (tr.), *Die Bücher der Geschichte*, Auswahl 1 (Stuttgart 1964) (Reclam).
 H. Stein, *Herodotos* (Berlin 1883).
 N. Thompson, *Herodotus and the origins of the political community: Arion's leap* (New Haven 1996).
 W. Turpin, 'Croesus, Xerxes, and the Denial of Death (Herodotus 1.29-34; 7.44-53)', in *CW* 107 (2013-14), 535-41.
 J.-P. Vernant, *Mortals and Immortals* (Paris 1991) (originally French 1979).
 北嶋美雪 (訳), 『ヒッピアス大』, 『プラトン全集』第10巻 (1975)。
 松平千秋 (訳), 『ヘロドトス 歴史』(上) (1971 岩波文庫)。
 吉武純夫, 「カロス・タナトスとは何か (上)」, 『ギリシア悲劇における死の受容についての研究』(科学研究費研究成果報告書, 2002), 1-32。
 吉武純夫, 「カロス・タナトスとは何か: Tyrtaios の戦死論」, 『名古屋大学文学部研究論集・文学』53 (2007), 87-109.

キーワード：カロス、クロイソス、ヘロドトス、許容範囲内、死

Abstract

'Fine End of a Life' and the Requirements of a Blest:
Hdt.1.32.5-9

Sumio Yoshitake

When Solon visited the palace of the opulent king Croesus, he said to the king that he could not deny that the king was less worthy than common men until he would see the king end his life *kalōs*. But what is the meaning of 'ending one's life *kalōs*'? What is the substance of this modification? In this case the meaning of *kalōs* must be very different from what it means when illustrating a good death in battle. For the king to be deemed worth no less than common men, not so much will be required, while one meaning of the adjective *kalos* is 'acceptable'. Then the possible idea is a death with acceptable level of inconvenience, any death that is not too bad in short. It is implied already in that passage that the first and the most essential requirement for Croesus to remain a blest is just not to die badly.

Keywords: *kalos*, Croesus, Herodotus, acceptable, death